

大阪・関西万博 訪問記

2025年4月13日から10月13日までの半年間、大阪府・夢洲（ゆめしま）にて、大阪・関西万博が開催されている。日本では2005年の「愛・地球博」から20年ぶり、大阪では55年ぶりの開催とあって、会場は連日盛況のようだ。

私も6月19日と20日の二日間、家族と夢洲の万博会場を訪れた。二日間で訪れたパビリオンの中から、特に印象深かった2つを紹介していこうと思う。

まずはフランスパビリオン。「地獄の門」「考える人」などで知られる同国出身の彫刻家、オーギュスト・ロダンの手の彫刻がパビリオン各所に展示されている。また、同国発祥のブランド「ルイ・ヴィトン」のトランク、「クリスチャン・ディオール」のドレス展示も見応え。芸術の都・パリを擁するフランスの威信をかけた展示に圧倒された。

続いては日本館。他国と同じく、工芸品などを展示して自国をアピールするのか、と思いきや……実際の展示内容は、「循環」をテーマとした環境の持続可能性を押し出したもの。万博会場で出たゴミが微生物の力でエネルギーへと姿を変える様子を、間近で見ることができたり、未来社会における藻類の可能性についての説明がなされている。

ここまでの説明だと、どこか堅苦しさを感じてしまうかもしれないが、心配は無用である。スタッフの方々が展示内容について丁寧に説明してくださるので、こちらも未来の技術について理解を深めることができる。また、様々な種類の藻類に扮した「ハローキティ」ら日本発の人気キャラクターに会えることも大きな魅力といえる。

二日間、万博会場に滞在して、海外の文化や未来の技術に触れることができ、とても有意義な体験をすることができた。

最後に、これから万博に行かれる方へ、アドバイスをしようと思う。

運動をしなさい。図書館に引きこもってばかりでまともに運動をしない私は、二日間万博会場を歩き回り、見事足が粉々になった。一日で最低2万歩は歩くので、それ相応の覚悟を持って万博に臨んでほしい。

そして、万博の雰囲気を感じ、楽しんでほしいと思う。（　　）



東京府東京市出身、奈良県や静岡県そして、様々な環境のもと育った。東京帝国大学を卒業後は横浜高等女学校にて勤務しながら小説を執筆し続け、パオロ南洋庁の官史を経て専業作家になる。しかし幼少期からの持病であった喘息の悪化により三十三歳で短い生涯を終えた。そんな彼の代表作には『山月記』『光と風と夢』などがあり、特に『山月記』は国語の教科書にも掲載されるなど多くの人々に親しまれている。

彼の作品は漢文調の端正で美しく無駄のない文章と独自の幻想的な物語が特徴的である。彼にしか描くことのできない情景と文面が織りなす唯一無二の芸術性が一番の魅力なのではないだろうか。今となつては誰もが知る文豪である彼だが、生前はほぼ無名であり他の文豪のように死亡記事が新聞に載ることもなかったほどだ。そんな彼が遺した作品はたったの約二十数篇のみ。彼は死期が近づき体の衰弱に苦しみながらも涙を流し文章を書き続けた。とんだ皮肉になるが、彼が短い生涯で数少ない作品に美しい文章を綴ることができたのは病弱であったからこそその葛藤と幼少期の目まぐるしい環境の変化の賜物だったのかもしれない。きっと彼は生まれながらに文豪であったのだ。（　　）

思想を盗め！

〜書きたい、書きたい 中島 敦〜

月★
高
この
の
1枚★
！



月高祭に向けて学年全員で
円陣を組んでいるだほー

場所：グラウンド 撮影：

心に移りゆく
よしなしごと

このコーナーでは、局員
が自身の体験や見聞を通
して思ったこと、考えた
ことを、「そこはかとなく」
書いた「エッセイ」を紹介
していきます。

〜Muscle days〜きらめけ★汗と涙

私は腕の太さに自負があった。私の腕は、いわば生ハムの原木のようにたくましいのだと。どんな辛いことがあろうとも、私なら、私の腕でなら、それを捻じ曲げることができるのだと。そう思っていた。いや、そう信じていた。だが、それは自惚れだったのだ。私は気づいてしまった。私の腕は細い。まるで、木枯らしにさらされた老木のように細々としていて、頼りない。同情の念すら湧いてくる。私は思った。これではいけないと。そして、決意した。筋トレをしよう……！

ということで、最近筋トレに興味を持ち始めたので、筋トレについて書きたいと思います。とりえず、腕を鍛えたいという目的があるので、腕立て伏せを極めようと思い、色々と調べてみました。するとどうでしょう、腕立て伏せ一つといっても、フォームについて気をつけるべきことが山程あり、さらには鍛えたい部位によって様々な派生フォームが存在します。なんて奥深いのでしょうか。私は、筋トレは自らの筋肉をひたすらにいじめ抜く、厳粛で苛烈な営みなのだと思っていました。その猛々しさから、私は筋トレの本質をつゆほども理解していなかったのです。興味を持ち始めて気づきました。その奥ゆかしさに。

筋トレとは、幾星霜を重ねて自らを育む、慈愛に満ちた営みなのです。そこには銜いなどなく、ただ自分を愛したいという思いが存在するだけなのです。その思いはアガペーにも引けを取らないでしょう。そして、多様に存在する筋トレメニューは、先人たちが私達に残した愛の結晶なのです。現代に生きる私達は、筋トレを通してその結晶をかき集め、いつしか久遠の愛を手に入れるのです。

筋トレがこんなに高尚なものだと知ってしまった以上、後戻りはできません。腕だけとは言わず、私の中にあるすべての筋肉を鍛え上げ、必ず愛と筋肉の化身になってみせます！

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！（　　）

月高祭記

今年の月高祭では「世界の遊び」をテーマに「モルック」、「カロム」、「マンカラ」について調べた。実際にそれぞれの遊びを体験できるブースを作り、ポスターも作った。一般公開日には多くの人が図書館に足を運んでいただいたので、非常に満足だ。

僕の担当はモルックだったので、はじめにモルックについて少し紹介しよう。モルックはフィンランドの伝統的な遊びであるキョッカをもとに考案された遊びだ。最近では、「さらば青春の光」の森田哲矢さんがモルック日本代表になって世間で注目されていたのが記憶に新しい。僕が特に日本の遊びにはないと感じたのが、そのゲーム性だ。簡単に言えばモルック棒を投げてスキットルという木の棒を倒す。ボウリングのようなものを想像していただくと分かりやすいだろう。ただここからが面白い。1本だけ倒すとスキットルに書かれた点数を獲得できるのだが、2本以上倒してしまうと倒した本数分の点数を獲得できるのだ。そして相手より先に50点びつたりを目指す…文章で伝わるかなこの面白さ。実際に僕も遊んでみたが、1本だけ倒すのはかなり難しいし、相手の妨害が入ることも考えながら遊ばないといけないのでかなり戦略を立てられて面白い。ぜひ一度図書館にきて遊んでみてほしい、かなり白熱すること間違いなしだ。

カロムについても紹介しよう。カロムは18世紀のインドを統治していたマハラジャによって遊ばれるようになったと考えられている。その後インド系移民によってヨーロッパやアメリカにも持ち込まれ、ローカルルールが作られていった。日本には明治時代に宣教師によって持ち込まれた。ルールは自分のコマをはじいて盤面にあるバックを四隅にある穴に落とす、おはじきとビリヤードをかけ合わせたものだと考えてほしい。ペナルティの数がかなり多く、なかなか1ゲームが終わらなかったが、スリルがあっけかなり面白かった。

マンカラやカロムも実際に遊んでみたが、やはり日本の遊びにはない面白さがあった。そこには各国で根付いた文化や伝統も関わってくるのかもしれない。例えばフィンランドはサウナやビールが昔から盛んで、そこでのお供としてモルックが流行ったそう。モルックは体力もあまり必要ではないし、手軽に遊べて誰でも参加しやすいから流行ったのだろう。日本の対戦型の遊びとしてよく挙げられる将棋やかるたなどは少しルールが難しいところがあるから、遊びやすさは違いとしてあるかもしれない。皆さんも世界の遊びについて興味があったら調べてみてほしい。（　　）



片言隻語

ギラギラと照りつけるような日差しが燦々と降り注ぎ、この夏の暑さのように私たちの気分も高揚してきたころではないでしょうか。

今月は月高祭も開催され、クラス一丸となって取り組む様子はとても素晴らしいものでした。大きな行事が終わってしまい、私は夏休みに入る前に燃え尽きてしまいそうですが、夏の本番はこれからです！みなさん、勉強に部活に恋に、全力投球しましょう！ですがそれだけではなく、夏休み後にはテスト三昧も待っています。くれぐれも気を抜かないようにしてくださいね。

それではみなさん、夜空に照り輝く花火のように、ビリビリと心に響く夏をお過ごしください。次号もお楽しみに！（　　）